新書紹介

文化が地域をつくる

山崎正和　編著
学陽書房　二百三十四頁　千五百円

「ホリデー」の話から始めたい。余暇開発センターの松田義幸氏は、「現代の人々は、休日・休業日と理解している」と述べた後で、次のように指摘している。「しかし、本来はもっと深い根源的な意味を有していたのである」と。

このことを、松田氏はプラトンに遡って説明している。プラトンによれば、神々は労苦を担って生まれた人間の種族を憐れみ、その労苦からの休息として、神々への祭礼という気晴らしを定めてくれた。祭日（holiday）を神々と一緒にすることにより、再び全体性（whole）を回復し、神々に感謝し、人間はこの祭りを祝うことによってリフレッシュメントを図ることができるのである。（プラトン「法律」）

ホリデーは「ホリー＋デー」（holi＋day）の合成語で、ホリーはホール（whole）であった。従ってホリデーは単なる休日ではなく、祝祭の日であり、心身の全体性を回復し、リフレッシュメントを図る日ーというのが本来の意味であったと考えられる。

以上は前置きであるが、地域での文化活動について考える時、ホリデーが持っていた本来の意味は、大変示唆的であると思う。すなわち、神々との一体感が失われた現代にあって、正に文化活動こそリフレッシュメントを図り、人々を生き生きとさせ得る活動であると思われるのである。

本書には、こうした活動の具体例が全国二十六地域にわたって紹介されており、そのいずれもが、それに携わる人々を生き生きとさせ、ひいては魅力ある地域づくりへとつながっていることが分かる。ここでは、横浜にも関係する一例を挙げたい。

＜都市の小さな手作りメディア～沿線コミュニティ誌「とうよこ沿線」の例＞

渋谷から川崎を経て横浜に至る全長二六・五キロの東急東横線は、いくつかの行政区分上をまたぐ形で路線が走っている。

昭和五十五年に創刊された沿線コミュニティ誌「とうよこ沿線」は、日常の「動線」に沿った住民参加型の新しいメディアの必要を感じて結成された「東横沿線を語る会」が発行している。

沿線の各駅を毎号順次とりあげて、その地域を紹介する「わが街シリーズ」や、住民の持つ古い写真で綴られた「アルバム拝借」欄などで構成される本誌は、編集人を中心に、沿線に住む学生、主婦、会社員ら三百二十人がボランティアで編集から配布までのあらゆる作業を分担、さらにパソコン通信のホスト局「とうよこNET」を開設し、より即時的で個別的な情報交換の場を提供している。

平成五年、「東横沿線文化交流会」が発足した。これは、「とうよこ沿線」を応援しようという地域の人々が集まってつくった会だが、同時に自主的な講演会、研修会、沿線企業の見学会などを企画して、住民の直接の交流の場にしていこうとするものである。

さて、本書はこうした活動事例のほか、岐阜市で開催されたフォーラム「地域は舞台」の内容をもとに発行されたものである。日下公人氏（ソフト化経済センター専務理事）による基調講演「夢起こし、コト起こしの成功例に学ぶ」、山崎正和氏（劇作家）をコーディネーターとするパネルディスカッション第一部「地域文化の戦国時代」、第二部「文化創造と地域の力」、さらに、梅棹忠夫氏（国立民族博物館顧問）、下河辺淳氏（東京海上研究所理事長）、佐野善之氏（サントリー文化財団専務理事）による鼎談「すべてを生み出す母なる地域」から成っている。

日ごろ、地域での文化行政に携わっている者として、特に興味深かったのは、梅棹氏が述べている「文化演出」のことである。梅棹氏は、今日の日本の地域の状況について、地域は「文化を生み出す母なる大地」というイメージもその力もあるとしながらも、地域を劇場と考えると、一番不足しているのは演出である、と語っている。

「文化演出というのがうまくいっていない。行政の役割の一つはそれだと思うのですけれど、必ずしも行政がうまく地域の演出をやるわけではない。演出家を次々につくり出すということが、これからは一国の文化の決め手になってくると思います。」と。

文化の演出家をどのように育てていくか、文化振興を図る戦略上、本市にとっても心すべき課題ではあるまいか。

本市の場合、いくつかの区においてカルチャーボランティアが活躍しており、文化活動を側面から支えている。現状では舞台照明や会場整理など、主に実質的業務の手伝いをお願いしている状況にあるが、区によっては企画段階から参加しているところもある。そうしたボランティアにあっては市民の文化を、さらに地域を、どういう方向性をもって創っていくかについても関心を高めていると聞く。

今後、こうした意欲のある地域の人材を登用し、育てることも一つの方法と思われる。いずれにせよ、文化の演出家の育成は、文化による地域づくりの重要なポイントになるだろう。

＜栄区役所市民課　山口景司＞